



T O K Y O R O P P O N G I R O T A R Y C L U B

東京六本木ロータリークラブ



『ロータリーは分かちあいの心』

～Rotary Shares～
国際ロータリークラブ会長

発行日 2008年5月12日

No. 33

『一歩一歩進もう』

～Let's Move Forward Step by Step～
東京六本木ロータリークラブ会長

W E E K L Y R E P O R T



平成20年4月21日
卓話 『響宴外交の舞台裏』
毎日新聞外信部専門編集委員
西川 恵様



西川でございます。今日はお呼びいただきありがとうございます。ワインと料理、儀典から外交を読み解くということですが、儀典の話はニュースにならないんですね。宮中晩餐会があったという1行で終わってしまう。しかし僕はそこに政治を読み解く鍵があると思います。きっかけはパリ特派員のときにエリゼー宮のもてなしを見て、そのときどきで出されるワインが違うことでした。

フランスワインは格付けされていますから歴史と分かるわけです。取材を始めて、そこに政治の意思、冷徹な計算が入っているのが分かりました。今日は英国のエリザベス女王のもてなしを取り上げます。つい最近のサルコジ・フランス大統領、03年のブッシュ大統領、05年の胡錦濤中国国家主席、いずれも国賓として英国を訪れました。まず胡錦濤主席のメニュー。料理は舌平目、子羊、サラダ、デザート。飲み物がシャサーニュ・モンラッシュとシャトー・ピション・ロングウィルなど。ワインに詳しい方はお分かりのように2つとも2番手のワインです。2番目がブッシュ大統領。03年春のイラク戦争に英国はアメリカの最大の同盟国として参加し、ブッシュ大統領はその半年後に国賓として訪問しました。おそらく両国はイラク戦争で共に戦ったことをたたえ合うセレモニーが必要だったんだと思うんです。このときのワインも2番手のものです。サルコジ大統領のときは例外で、ボルドー最高のシャトー・マルゴーとシャンパンはクリュグ。これは生産量が少なく実に手間隙を掛けていて値段もダントツ。しかもマグナムという希少なもの。公式の晩餐会のときは150人おります。シャトー・マルゴーとクリュグを50本そろえると値段も相当なものだと思います。エリザベス女王がこのワインにした理由の一つは英王室とフランスとの歴史的な太い関係。フランスもエリゼー宮で最高レベルのもてなしをする人はエリザベス女王なんです。僕はエリゼー宮の執事長にフランスは英国と国際政治の場でいつもけん

かしているのに、なぜ高いもてなしをするのか聞いたことがあるんです。そしたらこういう返事がありました。英王室は常に英仏関係のバックボーンであった。一次、二次の世界大戦で英国がフランスを支援した背景には英王室がフランスを支援するという意思で国民をまとめていた事実がある。それをフランスは忘れないんだということで、目を見開かされた思いがしました。事ほど左様に、エリザベス女王を迎えるときは手厚くするのが伝統で、これは英国がフランスに対するときも同じです。もう一つはサルコジ大統領の新しい英仏関係を構築したいという政治的姿勢。またEUの中で英仏関係の強化を進めている点。イギリスもそういうフランスと組んでEUでの存在感を高めるという共通の認識があると思うんです。政治に敏感なエリザベス女王ですから、当然そうした雰囲気も心得てメニューを決めていると思います。

エリザベス女王は本当に面白いスピーチをする人で、以前フランスに行ったとき、「英国のプラグマティズムとフランスの情熱、フランスの構想力と英国のユーモア、英国の雨とフランスの太陽。この補完関係を喜ぼうではありませんか。両国の違いに万歳」と演説しました。こういうスピーチは新聞にはほとんど載らないけど、これも一つのプロトコルだと思います。練りに練り上げたスピーチは、もっと報道されるべきです。政治の場では角を突き合わしても、現実の付き合いの場では互いに神経を使い手厚くもてなす。この二つがドッキングして初めて、その外交関係が分かるのだと思います。外交を分析する一つの手法としてご紹介しました。

